

【査読論文】

子どもの音楽表現活動における動きの分析 ー発達過程の視点からー

高牧 恵里 (武蔵野大学 教育学部 准教授)

松井 いずみ (明星大学 教育学部 特任准教授)

荒金 幸子 (上野学園短期大学 千葉経済大学短期大学部 非常勤講師)

要約

これまで、2歳児・3歳児・4歳児・5歳児を対象に、リトミックを中心とした音楽活動を行い、動きの視点から研究を重ねてきた。その中で、わらべうた《こまんか》を使用した音楽表現活動は全ての年齢で取り扱ったため、本研究ではこの活動を主軸に据え、年齢ごとの表現活動を分析することで発達過程の視点から動きの特徴を明らかにした。2歳児は主に模倣を通じて動きを探り、3歳児は動きのバリエーションを広げながら自分なりの表現を試み、4歳児になるとダイナミックで自由な動きが増え、5歳児では個人の創造的な表現に加え、2人組やグループ活動を通じた協調的な表現を見ることができた。このように、子どもたちの動きは発達とともに変化し、関わりを持ちながらより豊かな表現へと発展していくことが確認された。

1. はじめに

1歳から5歳の乳幼児は、身体が大きく成長する時期であり、併せて内面にある自分の思いや感じたことを言葉と身体の動きで表現することに目を見張るものがある。

これまで乳幼児のリトミック活動を通して観察してきたことは、体つきの発達と共に、体の動きが柔軟になり、言語においては「楽しい」「うれしい」といったプラスの情動が歓声として発せられ、年齢を追うごとに自分の言葉で表現し、友だちや身近な人に共有を求めるようになることだった。

感情神経科学者のヤーク・パンクセップ (Jaak Panksepp 1943-2017) と児童心理学者のコルウィン・トレヴァーセン (Colwyn Trevarthen 1931-2024) は、「音楽は我々を動かす。そのリズムは我々の身体を踊らせ、その音やメロディーを

掻き立てる。音楽は孤独な思案や回想を昂揚する。音楽は孤独感を和らげ軽くし、個人のあるいは共有された幸福を促すこともあれば、深い悲しみと喪失感を生じさせることもある。その音は情動を生き生きと伝える¹⁾」と述べている。この言葉は、私たちが音楽を自ら感じ取る能力を備えており、音楽が情動を伝える手段となっていることを示唆している。音楽を通して生じた感情経験は、子どもたちの成長の手助けとなり、文化的な生活環境にも影響を与えていくのではないかと考えられる。小さいころから培われているさまざまな情動が音楽や体の動きを通して表現されるのが「リトミック活動」であるといえる。

わらべ歌を使った先行研究の例として、赤川・木村（2024）²⁾の実践研究が挙げられる。異年齢児間のさまざまなわらべ歌の活動において、子どもたちの気持ちがつながり、「遊び」の楽しさを共有していたことが報告されている。一方、本論文は、2歳児、3歳児、4歳児、5歳児それぞれの年齢別に音楽活動を実施し、各年齢の子どもたちの活動の中から、わらべ歌《こまんか》に焦点を当てて分析している。

今回乳幼児のリトミック活動に取り入れた《こまんか》は、鹿児島県屋久島地方に伝えられている大小の波を表現して遊ぶわらべ歌である³⁾。屋久島地方を含む西日本において、この歌詞にある「こまんか」は「小さい」、「ふとい」は「大きい」という意味で使われている⁴⁾。子どもたちは、この歌詞のリズムにのりながら、波の大きさを動きの幅や強弱で表現している。子どもたちの表現したい気持ちを基盤に、《こまんか》を活用したリトミック活動を検討していく。なお、本稿では歌の題名を示す際に《こまんか》、歌詞や活動を示す際には「こまんか」と表記をする。

2. 本研究の目的

筆者らはこれまで毎年、2歳児・3歳児・4歳児・5歳児を対象に、リトミックを中心とした音楽活動を行い、動きの視点から研究を重ねてきた。活動内容は、それぞれの年齢に合わせたものであったが、わらべうた《こまんか》を使用した音楽表現活動は全ての年齢で取り扱った。本研究ではこの活動を主軸に据え、年齢ごとの表現活動を分析することで音楽から生まれる表現を観察し、発達過程の視点から動きの特徴を明らかにする。

3. 研究の方法

各年齢の音楽活動の記録動画をもとに、表現とその動きについて発達過程の視点から分析と比較を行う。動画は数台のカメラで撮影されているため、さまざまな角度から観察を行い、主に、指、腕、胴体、脚の動きに注目し分析していく。なお、園と保護者には研究に関する主旨を説明した上で同意を得ている。

4. 表現活動の内容と観察した場面

わらべうた《こまんか》は唱歌で、メロディーとなる音程の無い短いわらべうたである（楽譜1）。選曲の理由は、身近な「水の揺れ」をイメージしやすいこと、リトミックの要素である、音の強弱、ニュアンス、フレージングなどを感じ取りやすいこと、「こまんか」という歌詞の響きが心地よいこと、そして音楽のエネルギーの変化をダイレクトに表現しやすいことなどである。

この《こまんか》には、さまざまな遊び方があるが、本活動では子どもが自分の体を使って波の動きを表現することを目指す。まず両手人差し指を下に向けて揺らすことを基本の動きとし、エネルギーの変化に伴い、手、腕、胴体、脚などを使いながら波の大きさを表現していく。1小節を1フレーズとし、ゆったりとした揺れを感じることを、そしてイメージする波の大きさに合わせて歌い方を変え、音楽から生まれる子どもたちの動きの変化を見ていく。

（楽譜1）



【活動の基本的な内容】

海や波のイメージを共有する。

講師が歌いながら動く。徐々に子どもも一緒に歌う。

- 基本の動き：座った状態で、両手人差し指を下に向け、下向きの弧を描くようにして左右に揺らす。
- 座った状態での小さな波：小指を出し、小さく左右に揺らす。

- 座った状態での大きな波：上半身を使い、腕を下向きの弧を描くようにして左右に揺らす。
- 立った状態での大きな波：体全体を使い、腕を下向きの弧を描くようにして左右に揺らす。
- 跳躍を加えた大きな波：体全体を使い、ジャンプをしながら、腕を下向きの弧を描くようにして左右に揺らす。

本活動は、筆者らのうちの一人が外部講師として保育園・幼稚園の子どもたちと音楽活動を行なったものである。それぞれの子どもたちとは初対面であるため、園の先生方に、普段の様子や興味を持っているもの、歌っている曲などを事前に調査し、子どもたちとコミュニケーションをとった上で、この「こまんか」の活動を実施した。

2歳児の活動では、最初に「お水がちゃぽーん、ちゃぽーん」と声をかけながら指を動かし、「海」を身近な水の動きとしてイメージしやすいように伝えた。活動は通常の保育室で行われ、1～2歳児の子ども12名と保育者3～4名がいた。自由参加の形式であったため、カメラに多く映っている1人の2歳児の動きを中心に観察を行った。

3歳児～5歳児の活動では、「こまんか」の前に「海」について話し合い、波のイメージを膨らませることから始めた。広いホールで20～30人の子どもとともに活動を行ったため、本研究では特徴的な動きを抜粋して分析している。なお、5歳児の活動では、個人の表現に加え、2人組で相互に調整し合いながら表現する活動や、4～5人のグループで創作する表現活動も取り入れた。

5. 結果と考察

わらべうた《こまんか》を用いた音楽表現活動を通して、子どもたちがどのように動きを発展させていくのかを分析した結果、年齢ごとに表現の仕方や体の使い方に違いが見られ、発達段階による特徴が明らかになった。こうした動きは、音楽という外界からの刺激に対する身体的反応であり、人は生得的な能動性を持ち、外界への探索行動と知覚のフィードバックを通じて身体と外界の関係を学び、身体や外界の表象を形成しながら予測的な行動を獲得していくプ

ロセスと関連すると考えられている⁵⁾。以下に、年齢ごとの特徴的な動きとその考察を行なっていく。

・ 2 歳児の活動

2 歳児は、四肢を使って全身を大きく動かすこと⁶⁾や、他の人とリズムを共有すること⁷⁾ができるようになる。本活動では、まず講師の動きを一生懸命に模倣しようとする様子が見られた。座った状態では、人差し指を出して波の動きをしようとするが、講師のように下向きの弧を描くことができず、直線的に左右に動かしていた。まだ細かい指のコントロールが難しく、自分の指の動きを見ながらどのように動かせばよいのかを試行錯誤していることがわかる。小指を使って小さな波を表現する際には、肩をすぼめながら小指を顔の前に出す動作と、小さく横揺れする動作を同時に行うことができず、両手の小指を鼻に付けたまま途中で動きを止める姿が見られた。これは、まだ複数の動きを同時に調整することが難しく、「小さくすること」を優先する姿勢が現れていると推察する。立った状態での大きな波の表現では、講師の「一番大きいのは？」という問いかけに対し、胸を張り両手を高くあげるが、腕を弧の形に動かすのではなく、片方の腕を高くあげ、もう片方を胸の前に折り曲げるといった、やはり直線的な動作を繰り返していた。さらに、音楽に合わせて左右の足に重心を移す動きや、膝を曲げた不安定な状態で待ち、音楽のタイミングに合わせてよとする姿など、全身を使った表現が見られた。

・ 3 歳児の活動

3 歳児は、何かになりきって表現することを楽しんだり⁸⁾、自分の身体に関心をもったり⁹⁾するようになる。本活動でも模倣だけでなく、自分なりの表現を試みる様子が見られた。両手人差し指を使って下向きの弧を描く動きができるようになり、小さな波を表現する際には、肘を曲げて胸の前で小さく動かす、膝のあたりで動かす、肘を軸として左右に動かすなど、様々な表現が生まれた。子どもたちが波のイメージをもとに、より自由に体を動かせるようになっていくことがわかる。立った状態では、腕を左右に大きく振るだけでなく、体を左右にねじる、腕を斜め上にあげる、ジャンプの前にしっかり膝を曲げて踏ん張

り、跳び上がる準備をするなど、動きにバリエーションが加わった。また、にこやかな表情で首を少し傾げて講師と目を合わせ人との関わりを楽しんだり、「クルクルする」と言って回転しながら、より多様な動きを楽しんだりしている様子も見られた。さらに、音楽の強弱に合わせて手の上げ下げを加えたりするなど、自発的に動きを工夫しようとする姿も見られた。

・ 4 歳児の活動

4 歳児は、片足でバランスを取ることができたり¹⁰⁾、リズムと音を楽しみ、わらべうた遊びでも鼓動を正確に感じ表現できたり¹¹⁾ するようになる。本活動では、さらにダイナミックな表現をするようになり、体のねじりやジャンプを加えた動きが増えた。座った状態の活動では、腕の振りだけでなく、体を左右にねじる動きが加わった。また、椅子に座ったままでも、指の動きだけでなく、全身を小さく揺らしてリズムを取る様子が見られた。立った状態では、左右に重心をかけながら大きく両腕を振り、つま先まで使ってバランスをとる、片手ずつ腕を前に投げ出すような動きで表現する、足を踏ん張り、腰を屈めながら力強く波を表現するなど、全身を使ったエネルギッシュな動きが見られた。イメージをもとに自分なりの解釈で波を表現する姿も増え、音楽の変化に応じた表現の幅が広がり、より多様な動きが見られるようになった。

・ 5 歳児の活動

5 歳児になると、より創造的な動きを見せるようになる。まず個人での表現では、指先を使った細かな波の表現から、腕全体を使った大きな波の表現まで、思い通りに体を動かしている様子だった。音楽の強弱を意識しながら、手首を柔らかく使う、手のひらを広げ5本の指を大きく開く、腕を十分に脱力させながら振ったりするなど、細かいニュアンスをつける姿も見られた。立った状態では、腕の動きに合わせて腰や頭を使ったり、両足に体重を移動させながら波を作ったりするなど、全身を連動させた動きが見られた。走り出したり、ジャンプをしながら腕を大きく振ったりするといった空間動作など、躍動感のある表現が増え、波の力強さを感じさせる動きも見られた。

さらに、5 歳児は、違う考えを理解し、お互いの意見を言い合えたり¹²⁾、イ

メージを共有し協力して遊んだり¹³⁾、仲間を意識し、いっしょにできる喜びをもつこと¹⁴⁾ができたりするため、本活動においても2人組での表現や、グループでの創作表現を試みた。2人組での表現では、相手と即時に息を合わせることが求められる。向かい合って両手をつなぎ、左右の揺れを合わせるなど、互いの動きを意識する姿勢が見られ、相手の力を感じながら引く動き、加速させる動き、重心を移動させる動きなどからは、相互作用が生まれていることがわかる。また両手をつないだまま相手を信頼し、リズムに合わせバランスを取りながら片足を上げる、左右交互に振り上げる手の方向に顔を向け、体をねじるなど、協調性のある、より高度な動作も見られた。

2人組の自然な相互作用が生まれる活動に対して、5人程度のグループ活動では、どのように「波」を表現するか、事前に数分間の話し合いの場を持った。子どもたちは「小さい波」の時にはどのように動くか、「大きい波」の時にはどうするのが良いか、立ったり座ったりしながら、「どうする」「こうやって」「こうだよ」「できた」などと発言しながら動きを探り、活発に相談していた。その際、周りを見渡し、他のグループを観察する姿が見られたため、グループごとの動きの発表を行うことになった。

小さい波を表現する際には、5人で円になり頭を垂れて背中を丸め肩が触れるほど寄せ合う、または輪になって手をつなぎ前後に小さく腕を振ることで小さく揺れる波を表現するなど、グループごとの工夫が見られた。大きな波を表現する際には、手をつないだまま左右に引く力を徐々に強くし、最後に全員が引き寄せられるような動きを作り出すグループや、ギャロップのようにジャンプしながら回転し、高低差をつける動きを見せるグループもあった。また、手を離さずにジャンプしながら広がる、あるいは思いがけず生まれた加速を止めるようにしてその場に留まった子どもを中心にコンパスのように回るなど、即興的な動きが生まれる場面もあった。

動きの発表は、実質的には1グループ20秒ほどであったが、即興的に生まれた動きも取り入れながら、創造的な表現が見られた。動きの中には、静かに揺れるような情緒的な表現から、波の勢いを感じさせるような力強いものまで、音楽の持つ情感を表現しようとする姿があり、子どもたちは、互いの動きを観察しながら、自分たちの動きを発展させていった。また、偶然生まれた動きが

その場の空気を変え、新たな動きを誘発することもあり、そうした即興的な表現が、より豊かな身体表現へとつながっていた。互いに目を合わせたり、声を掛け合ったりしながら動きをそろえようとする様子も見られ、表現を通したコミュニケーションが生まれていた。

・総合考察

本研究では、わらべうた《こまんか》を用いた音楽表現活動を通じて、子どもたちがどのように体を使いながら表現を発展させていくのかを分析した。その結果、2歳児は主に模倣を通じて動きを探り、3歳児は動きのバリエーションを広げながら自分なりの表現を試み、4歳児になるとダイナミックで自由な動きが増えた。5歳児では個人の創造的な表現に加えて、2人組やグループ活動を通じた協調的な表現を見ることができた。このように、子どもたちの動きは発達とともに変化し、他者と関わりながらより豊かな表現へと発展していくことが確認された。

リトミックを創案したジャック＝ダルクローズは「子どもや若人たちに、もっぱら私たちの祖先が行ったことについての知識の上のみに築かれた一般的な教育を授けるだけでは不十分である。教育者たるものは、彼らが自分たち自身の人生を生きると同時に、それを他の人々の人生と調和させる手段を身につけるよう、力を尽くさねばならない¹⁵⁾」と述べている。単なる知識の伝達ではなく、子どもたち自身が主体的に感じ、動き、試し、考え、他者と関わる経験を積むことが、より豊かな成長につながるといえる。

6. 終わりに

文部科学省は、子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性として、「人の一生において、幼児期は、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期である」そして、「この時期に経験しておかなければならないことを十分に行わせることは、将来、人間として充実した生活を送る上で不可欠である¹⁶⁾」と示している。

このようなリトミック活動では、日頃の生活環境だけでは得難いことを音楽活動の中で体得することができる。音の速さ、音楽の強弱を音楽の持つエネル

ギーとして感じることで力の加減を知ることができると思う。

子どもたちの生活環境はさまざまであり、子どもの周りにいる大人たちの提供する音楽表現活動は、子どもたちに日頃の体験や経験値に個人差があっても、一つの新たな刺激をもたらすことができると思う。そして、子ども同士がふれあい協同しながら創り上げる過程は、相手の言葉や表情を感じ取ろうとする温もりのある姿をつくりだす。さらに、大人が豊富な経験を備えながらも目の前にいる子どもの成長段階に合わせ柔軟性のある刺激を提供することで、温もりは心のエネルギーとなって感性を育んでいく力となり、子どもの心を豊かにし幸せへとつながっていくと思う。成長段階での身体表現は子どもの発達に有効であると考え、今後も、より一層子どもたちの感受性や創造性を高められるような音楽表現活動について、継続的に研究を深めていきたい。

謝辞

本論文は、2024 年度しあわせ研究費（研究テーマ：子どものリトミックを通しての表現活動に関する研究）の助成を受けたものです。

この研究を実施するにあたり、武蔵野大学附属慈光保育園、武蔵野大学附属幼稚園の先生方に研究の趣旨をご理解いただき、在園児のみなさんにご協力いただきました。ここに深く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1 ヤーク・パンクセップ、コルウィン・トレヴァーセン著，福山寛志訳（2018）「第7章音楽における情動の神経科学」『絆の音楽性』音楽之友社，p.101.
- 2 赤川洋子・木村直子（2024）『子どもたちの主体性を育む「遊び」や保育の「しかけ」に関する実践研究—手遊び・リトミック遊び・わらべ歌遊びにおける異年齢保育の事例を通して—』鳴門教育大学学校教育実践研究 第1号，pp.93-97.
- 3 久保けんお 他（1980）『日本のわらべ歌全集 26 鹿児島 沖縄のわらべ歌』柳原書店，p.122.
- 4 佐藤亮一（2019）『都道府県別・全国方言辞典 CD 付き』三省堂，p.424.

- 5 儀間裕貴・大城昌平 (2024) 『子どもの感覚運動機能の発達と支援—発達の科学と理論を支援に活かす—改訂第2版』 メジカルビュー社, p.4.
- 6 乳幼児の発達と保育研究会 (2022) 『0・1・2歳児の発達と保育：乳幼児の遊びと生活』 郁洋舎, p.139.
- 7 同上書, p.164.
- 8 乳幼児の発達と保育研究会 (2022) 『3・4・5歳児の発達と保育：乳幼児の遊びと生活』 郁洋舎, p.32.
- 9 同上書, p.47.
- 10 同上書, p.104.
- 11 同上書, p.121.
- 12 同上書, p.128.
- 13 同上書, p.144.
- 14 同上書, p.158.
- 15 エミール・ジャック＝ダルクローズ著, 山本昌男訳 (2003) 『リズムと音楽と教育』 全音楽譜出版社, p.xi.
- 16 文部科学省・中央教育審議会、平成17年1月28日『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）「第1章子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性」』（2025年3月20日取得, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm)